

村落構造論と共同生活の研究

——余白埋めのためのノート——

農村社会学で最初に村落構造の概念を用いたのは、福武先生の戦時中の著作「中國農村社会の構造」だと思う。「共同生活」の研究という中心的テーマのもとにおこなわれたこの研究は、前半部では構成において鈴木社会学の影響を強くうけていたし、同族や家族の研究が重視されている点においては、当時の農村社会学の研究の最新の成果を汲みとっていたと思う。もうひとつこの研究は社会学への方法的反省と自覚に基づいた「社会的現実」への全体的接近という課題意識につらぬかれていた。この課題意識が、共同生活を経済、階級、政治と統一認識するという方法の発展をもたらし、後半部における村落構造論の形成となつたように思われる。しかし、戦後の

「村落構造の研究のために」という論文には「生活」研究の課題はぬけおちている。この傾向は、農村社会学の強力なひとつつの流れにも継承され、経済、階級、政治が重視され、生活研究が軽視された。この結果、構造や機構の研究の画期的な展開はあったが、共同生活を通じて、民衆が内から地方社会を形成してゆく歴史をみるという視点においては不十分だったと思う。失われた共同生活の研究という視点を取り戻す必要ではないか。このことは、島崎会員の投稿にもみられる地方自治の主体と内実を形成するという今日的課題にも結びつくだろうし、また、村研における研究の交流の促進にも役立つと思う。

(事務局 高橋明善)